

近代 史学的方法 VS.ハディ ス方法 (2/5) : 内部による批

:

明:

史の において用いられる近代的方法 と、ハディ スにおいて用いられるものとの比 。第二部: 欧米による近代的な 史学方法 と、内部批 。

目:[事言者ムハンマド彼の言 に して](#)

より: リ ム アッサ ム

日 29 Aug 2011

集日 29 Aug 2011

内部による批



内部による批 とは典 の内容に するものであり、それは外部による批 の に当然のこととして行われるもの (Lucey 24) です。この段 における目的とは、 言内容の信 性を することです。 史家たちはその 始にあたり、 言者の 言内容が何を意味するのかを理解しなければなりません。そうすることによってはじめて、 史家は となる 人の信 性に する 切な 定を下すことができます

。人の信性を するという事は、その人物の能力（知を元 っているかどうか）と正性（正直な言者かどうか）を共に させることです。 に、上の によって一部の言は退けられますが、相当数の言は信 に するものであるとして されます（Lucey 24）。

言は常に 化し けるために、言の真の意味を理解することは な作 ではありません。言が 逐 的に使用されず、 の意味が付属されることは 繁にあります。史家は 言内容を的 に理解するために、作者や 人が付属させた意味を汲み取る必要があります、典 の由来する 代に使われていた 用句についても精通していなければなりません。当然のことながら、史家は典 において使用されている言 に堪能でなければなりませんし、その作 のためには 言学の も受ける必要があります。

典 や 言内容を 切に理解するには、どのような人物や人々がその典 をつくったのかを知る必要があります。言い えると、彼らの性 や 味の 象は何だったのか（Marwick 223）ということになります。彼らの学 、人生における地位、政治的 点、そして性格がされるべきなのです（Lucey 73）。また、彼らの年 や も重要です（Lucey 78）。これらの知 は人の信性を 定する に有益となります。さらに、特定の典 がいかにして、または何故もたらされたのか、そしてそれが に して意 されたものだったのかを知ることも重要です。史家が 人の意 とその 言内容を正 に理解することが出来れば、次に人の信性を する段 へと みます。

この段 では、典 を提供する人物（または人々）が に当事者としてその 象に する知 があつたのか、そして彼らが真 を述べているのかどうかを します。この 点においては、象の典 に する公正さを 持するため、それに して肯定的または 疑的のどちらでもないことが 切な 度（Lucey 73）であると言われています。人による言は、それが完全に信 の出来ないものであると断定されるまでは んじられるべきではありません。人が多少の いを犯すことは、彼の言の殆どが事 である限りは 容されます。史家の言 を借りると、以下ようになります：

「したがって、言内容の信性は、人自身の性とさに由来するのであり、これら二つのことは当然のこととして受け止められてはならないのである。彼の察能力はされ、察会は明され、さはされ、人が犯すであろうちを考するためには他の人の言と比されなければならないのである” (Lucey 73-4)。

典の信性をさせる事のなかには、典の性や目的を初めとする、そのにする知が含まれます (Lucey 77)。典の各には、独自の基があります。例えば、政治的文と社は同じ点からはまれません (Lucey 77)。それに加え、特に公的な人物の場合、特定の人のさ、道的性格、性は既にされている合もあります (Lucey 78)。したがって、そういった人たちの言は、彼らにとって不利な事が明されない限り、その信性を疑う必要がないのです。

この段において、史家が注意すべきいくつかの事があります。それは、人の察能力が格であるとめてかかることです。人の出くわした出来事がとしてあったことがされなければならないだけでなく、格な人がしっかりとしたこともされなければなりません。の注意事としては、共通のちのもとにすることです。代表的なものには味な、偏や先入などがありますが、察能力の不といった欠点は、正当性にする重大な疑いをもたらします (Lucey 75)。典の人または作者にするそのような欠点は、史家による解を容易に生み出す要因となります。

史家らはただ一人だけの人による言を受け入れることに躊躇しますが、人が条件をたしていればそれは正当化されます。当然、数の人がいた方が好まれ、その数が多ければ多いほど良いのです。もちろん人たちは格ででなければなりませんし、告した出来事に近かったか、または最低でも近かった人々から知を得たのでなければなりません (Lucey 79)。人が格であればあるほど、史家にとっては仕事がになります。そうして彼は数の言を比し、ちを排除し、信のおける典を用いて新たな人の信性を定させることが出

来ます。

信性を定するためにいくつかの典同士を比較する、次の三つの可能性があります。その典について肯定しているか、否定しているか、または沈んでいるかです。数の典にして肯定するだけでは、その典の信性がされるには至りません。それらの典が独立しているかどうかは定されなければなりません。そうでなければ原典にする策略または依が疑われることとなります (Lucey

80)。特に出来事が公のものであったのなら、多くの独立した告があるはずです。しかし、もしも数の典が一致しなかったり、矛盾したりするのであれば、その場合は相の度合いや典の性などをべなければなりません。小さな点やにおける相だけでは、その典は信性を落とすに至りませんし、それらは一般的であり、予期されるものです (Lucey 81)。かけ上の矛盾と本物の矛盾とを混同しないよう注意されるべきであり、批の定を慎重かつ忍耐く遵守することによって、かけ上の矛盾にするが解されるかもしれないこともされるべきです (Lucey

83)。しかし、もし本物の矛盾がある場合、それらがの根による信性をち取るまでは、それらのどの典も使用されてはなりません。あるがを呼ぶようなものであれば、利害者や者にしては力注意すべきです。

第三のシナリオとしては、の言にし、典が沈をしている合です。そのような言にしては否定的な度が取られますが、直ちに退けられるではありません。言が退けられるためには、沈する人たちが出来事について知る能力があったこと、そして彼らがそれらを告しなければならない状にあったことがされなければなりません (Lucey 84)。しかしそれらをすることは困です。

史家が数の典をふるいにかけて、外部と内部双方の批を格に用すれば、ようやくに取りかかることが出来ます。すべての料を配列、合し、正しい出来事として再建する作は、史家自身の解も伴わなければならないため、容易な作ではありません。信における典への史家による解の姿が、特定の出来事の再建を形作るのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/937>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。